

LEE Kah Hui (リー・カーフイ)

東京大学大学院人文社会系研究科 文化資源学研究室 博士課程1年

## 日常の都市遺産マネジメント： 東京とシンガポールにおけるノスタルジアの表出と都市景観保護

### 発表要旨

本研究では、今日のアジアの大都市において、日常空間にある都市遺産マネジメントの現状及び在り方を示すことを目的としている。2011年からユネスコによって提唱されてきた「歴史的都市景観に関する勧告」の文脈において、都市遺産 (Urban Heritage)、都市景観 (Urban Landscape) とはいかなる概念かを明らかにする。そして、東京とシンガポールを中心に、「都市遺産」の創出及びその核にあるノスタルジア (郷愁) を考察し、従来の保護政策を比較する。都市景観の基本的な評価手法を明らかにする上、その保護仕組みの在り方を考察する。

世界全体の都市化が強まり、2050年までに都市圏における人口は人類全体の68%に増加すると予測される。こうした状況の中、アジアの都市では開発事業が盛んで、都市空間が恒常的に変容している。同時に、変化に抗うかのように、過ぎ去った時代が集団的に懐古・追慕・理想化され、ノスタルジアによって評価された都市遺産や新たな社会的・商業的活動が生まれている。レトロブームを通しての郷愁の商品化、ノスタルジアの喚起を目的とした文化遺産の保全・創造・捏造等は、日常の都市遺産マネジメント及び都市の変容に反映されている。一方、行政側には、都市変容に影響されないよう、過去を表徴する個別の文化遺産を保存する制度を導入してきた。近年の潮流は、より様々な事物を包括的に文化遺産と捉え、都市開発と遺産保護が相反すると捉えられる課題を改善するために採択された「歴史的都市景観に関する勧告」から見られる。

シンガポールは、都市再開発と、集合的記憶を喚起するために都市遺産を取り戻す必要性の圧力に拮抗する都市を例示している。独立から急速な都市化が進行され、その過程でほとんどの歴史、特有の文化が消されたと論じられてきた。文化遺産の重要性、懐古趣味の社会的現象を認識し、記念建造物の保存、保存地区の指定、文化遺産と博物館の方針を示す初マスタープランとなる「Our SG Heritage Plan」等が進めてきた。一方、日本において、急速な経済成長と開発に危機感を抱いた人々による愛郷運動、愛国心を背景として、文化財保護に関する諸制度は発達してきた。当初重点保護主義、厳選主義と批判されたが、多種多様な文化財をさらに幅広く保護できるよう、登録制度や文化的景観等の制度が創設されてきた。しかし、両国において文化遺産として認められるべきもの、日常空間の配慮と、妥当な保護手法に対して疑問はまだ残っている。

この背景を踏まえ、本研究は、東京とシンガポールにおいて、過去のどのような側面がノスタルジアの対象となり、その結果としていかなる社会的現象が生じているかを検討する。そして、都市景観の現状と保護する方針の比較分析を行う。発表では、研究構成、「歴史的都市景観に関する勧告」に関する分析、都市遺産とノスタルジアの議論、両国におけるノスタルジアの対象、生じている社会的現象と文化遺産保護政策を論じる予定である。

(1200字)